

〔實隆公記〕文明十五年八月廿八日戊子、昨夕於庭上擒鵠。今朝令進禁裏了、自愛之由被仰下、多幸多幸。

〔就狩詞少々覺悟之事〕一射まじき鳥の事○中鵠鴟

〔武江產物志〕水鳥類 鶴鴟 鶴鴟御堀端邊

〔倭名類聚抄羽族名〕稻負鳥 萬葉集云、稻負鳥其讀以奈於保世度里

〔箋注倭名類聚抄鳥名〕稻負鳥原書無載。按新撰萬葉集卷上一見、則似傳寫誤脫新撰二字也。然伊呂波字類抄亦無是二字、或源君誤引。按稻負鳥卽鵠鴟也。學鵠鴟搖首尾得交道見神代紀故日本紀私記謂鵠鴟爲止都岐乎之倍止利而歌云、遇事乎、稻負鳥乃不教波人乎戀路爾、迷萬之也波、則知稻負鳥之爲鵠鴟也。

〔倭名類聚抄序〕或漢語抄之文、或流俗人之說、先舉本文正說、各附出於其注。若本文未詳、則直舉辨色立成、楊氏漢語抄、日本紀私記、或舉類聚國史、萬葉集三代式等所用之假字。水獸有葦鹿之名、山鳥有稻負之號。○中略 是也。

〔類聚名義抄九鳥〕稻負鳥 イナオホセトリ

〔綺語抄動物〕いなおほせどり、或人云、にはた、きをいふとぞ。

〔奥儀抄下ノ上〕古歌云

逢事をいなおほせどりのをしへすば人をこひぢにまどはましやはとあり、是につけてにはた、きと申人もあれども、本草和名圖名苑などいふ文こそは、よろづの物の異名かたちをさへあかしたるに見えたることもなし。又順が和名にはた、きをも、鷺鷹又鵠鴟などかきて、注には日本私記云、とつぎをしへ鳥とかかり、又別に稻負鳥と書いて、注にそのよみいなおほせどりとかきて、萬葉集を引文にいだしたれば、こととりと見えたり、順亥らざらんやはた、しかの古歌に